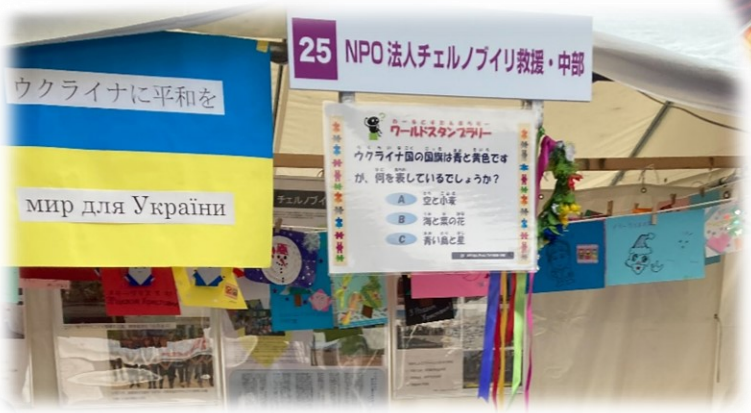
「ポレーシェ」とは、チェルノブイリ付近の湖沼低地帯の呼称です。

2022 年 12 月 15 日発行　　特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部

３年ぶりの「ワールド・コラボ・フェスタ」でクリスマスカードキャンペーン



10月22日（土）快晴の下、3年ぶりにワールド・コラボ・フェスタが、名古屋のオアシス21で開催されました。22（土）23（日）両日で、延べ40団体以上のブースが並び、ステージでは、様々な国の歌や踊りが披露されました。今回は、ウクライナ関連のブースが目立ちました。

チェルノブイリ救援・中部は、クリスマスカードキャンペーンを行いました。賑やかな会場の中で、ほとんど途切れることなく、カード作りが行われました。毎年、カード作りに参加しているという、お母さんと小学生の男の子。ウクライナ語で「クリスマスおめでとう」とすらすら書かれるのには驚きました。二人の語らいもほほえましかったです。男子の大学生二人は、戸村さんからチェル救の活動や、ウクライナの現状の話を、とても熱心に聞き入って、その後にカードにも挑戦してくれました。色画用紙にクレパスで絵を描く。クレパスなんて小学校以来だと楽しそうでした。河田さんからザポリージャ原発のレクチャーを受けているお母さんの隣では、5歳と7歳の姉妹が、無心にカード作り。それにしても、子どもの発想の柔軟さと持久力はすごい！

持参してくださったカードと、ブースで作成してくださったカードをあわせて61枚。サンタクロースの折り紙は80個。力作ぞろいです。戦争収束の兆しが未だ見えないなか、カードが無事に届くように、そしてカードを手にする子どもたちの笑顔を祈らずにはいられません。（橋本）

「善のために戦ってください、ウクライナとともにいてください」

オリガ・ヤスィノク（栃木県）

【5 年ぶりに見たウクライナ】

2022 年 7 月末の 1 週間だけの滞在でした。数ヶ月後、さらに大きなテロルによって陰鬱な闇に包まれた深淵が生じたかのようです。10 月に私の出身大学とシェウチェンコ公園が爆撃された後、何ヵ所もの熱供給発電所が爆撃を受け、私の家族や友人たちが電気、集中暖房、携帯電話の接続を奪われました。職を失った友人も。この闇が、打ち勝つことのできない永遠なものに見えても、私は光と善の勝利を信じ続けます。私がウクライナの勝利を信じるのは、ウクライナ人を信じているからです。そう、私たちは自分の大いなる力と自分自身への信頼、そして皆さんのご支援によって、このすさまじい悪に打ち勝ちます。私の旅で見た、体験した思い出です。

【ポーランドで見たもの】

最初の強い印象は、到着したポーランドで受けたものでした。風景も人々も、ウクライナに非常に似ています。ポーランドはウクライナの隣国で、国境線を越えただけで、安全と平穏があり、戦争は存在しません。空襲警報のサイレンも聞こえません。その代わりに多くの、本当に多くの、戦争を逃れてきたウクライナ人たちをバス・ターミナルで見ました。着いたばかりの避難者か、帰国する人たちです。彼らは途方に暮れ、疲れ切っていました。もう若くない男女、多くの女性たちと小さな子どもたち。ティーンエイジャーたちは、自分の国で友達と散歩したり、コンピューターゲームや宿題をしたり、ママが作ったおいしい晩ご飯を食べていたかもしれないのです。その代わりに汚いバス・ターミナルで、清潔でない服を着て、手にはホット・ドッグを持ち、頼りなげに順番に駅の電光掲示板やスマホを眺めていました。小さい子どもでもなく、かといって仕事をしたり祖国を守るために前線に行くことのできる大人でもない、限りない絶望を目に浮かべている彼らが一番かわいそうでした。彼らはどうなるんでしょう？どこに行くんでしょう？　私たちに何ができるでしょう？彼らのまなざしから感じられるのは、絶望と戦慄でした。

【キーウまでのバス】

途中は見慣れた風景が広がっていましたが、突然、爆破されたマーケット、倉庫、住宅が現われてきました。バスは止まることなく先に進んでいきました。この、戦争が生み出した恐ろしい衝撃的な光景は、ウクライナのありふれた現実になり、地元の人の目には普通のことなのです。私は自分を抑えられなくなって、写真を撮ろうとしてスマホを手に取りましたが、目の前にあるのは既に畑や森でした。

たくさんの検問所があり、いくつかでバスは止まりました。機関銃を持ったウクライナ兵士が乗り込んできて、全ての乗客の身分証明書を調べました。これは私たち全員の安全のためですが、機関銃は恐ろしかったです。見ていると落ち着かなくなり、心の中で不安と警戒の糸が張りつめ、冷静な判断力が失われていきます。キーウでも何度も武器を持った軍人を見ましたが、その度に何か同じものを感じました。慣れることは難しいでしょう。

【空襲警報】

私のもう一つの非常に恐ろしいものは、空襲警報でした。想像してみてください。街は太陽に照らされ、皆美容院に行ったり、郵便局で小包を送ったり、カフェでコーヒーを注文したり、ショッピングモールで生まれてくる赤ちゃんの服を選んだり、シャワーを浴びたりしています。その時突然、空襲警報が鳴り響き、いつもいきなりで、心の準備はできていません。全ての施設は閉まり、全てが止まって、シェルターに行かなければなりません。最初の日、私は他の人たちと地下鉄構内に避難しました。でも大部分の人たちは、空襲警報に関係なく通りを歩いていました。昼夜を問わず 1 日に何度も鳴り、何時間も続きます。地域によっては 1 日中続きます――それはいらいらさせ、疲れさせます。そして注意を払わなくなります。私は最初に空襲警報を聞いた時の気持ちをよく覚えています。それは怒りでした。どうして私たちにこんなことをするんでしょうか？　何の罪もない、微笑んでいる人たちに？いったいなぜ⁉　私たちの生活に踏み込んでくる、どんな権利があるというんでしょうか？

【みな自分の人生を生きようと】

苦しみと恐怖を、ウクライナ人たちは心の深い所にうまく隠しています。そこは微笑みと善良さと理解にあふれる国でした。店や通りでの知らない人たちとの会話は、とても気持ちのいいものでした。注意深く、でも親しげに見つめられ、視線を返すと微笑が返ってきます。皆レストランやコンサートに行き、話し合い、時間のあるかぎり、自分の人生を生きようとしています。戦争が、人々の中にあるものを解放し、最良のものを目に見えるようにしたかのようです。皆が悲しみ、涙に暮れているだろうと思っていたのに、感じられるのは人々の愛情とあたたかさと連帯感です。母国の人たちは、今恐ろしい悲しみと不幸を経験し、遅かれ早かれ、トラウマとなって現われるでしょう。でも私が見たのは、最高にすばらしい、英雄的で落ち着いたウクライナ人たちでした。

【多くの軍人たちの写真】

私は友達と町を散歩しました。記念碑は砂をつめた袋で囲まれ、自分たちの文化遺産を守ろうとしています。通りでは、あちこちに対戦車のバリケードがありましたが、町の生活はいつもと同じように見えます。でもある時、私はひどく悲しくなりました。友達とオーケストラのコンサートから帰るところでした。ムィハイロ寺院のそばの通りで、私は無数の軍人たちの写真を見ました。

私の国を守って死んだ人たちです。大部分は私より若い人たちでした。広場には破壊されたロシアの軍用車両がたくさん展示されていました。それらは、破壊されていても非常に恐ろしく見えました。戦車の砲口はまっすぐ私の顔に向いていました。そして、避難しようとしていた人たちの銃撃された車がありました。窓ガラスには、大きな字で「子どもたちが乗っている」という札が貼られていました。敵にとって、最高の標的ではありませんか！　見たものにショックを受けて、私は声を上げて泣いてしまいました。このろくでなしたちが、こんな怪物に乗ってやってきて、私たちを撃ち、ミサイルや爆弾を落とし、私たちの家や畑に地雷をしかけるどんな権利があるというのでしょうか⁉　どうして私たちが退却し、何かを与えなければならないんでしょうか？　私たちは自分の国にいるのです！　私たちに戦車で砲撃しているのは彼らです。彼らがウクライナの子どもたちを殺し、ウクライナの女性たちをレイプしているのです。その先に、「世界よ、私たちを救って！[WORLD HELP US]」 というプラカードが見えました。そうです。私たちは皆団結しなければなりません。罪のない、誠実で自由なウクライナ人たちを救うために。善は悪に打ち勝たなければなりません。そうでなければ、生きている意味があるでしょうか？

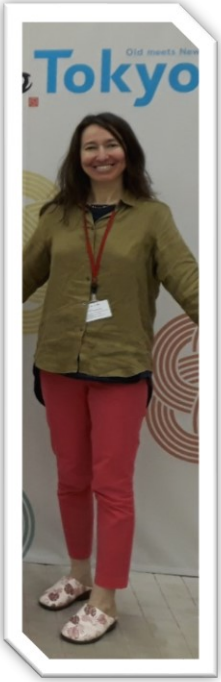
【自分の考えを言える、自由でいる、生きる権利を守るために】

そばを若い人たちが通り過ぎていきました。大学生、それとも高校生かもしれません。この金属スクラップを見て、一人の女の子がロシア語でのんびりと言いました。「どうしてここにこんなものがあるのか、わかんない」と。私は、彼女に答えたいと思いました。これが、たった今私たちの国で起こっていることを、目に見える形で思い起こさせるほとんど唯一のものなんだと。この女の子が自由に夕方のキーウを散歩して、こんなことを言えるのは、勇敢な軍人たちが自分の命を犠牲にしているからなんだと。考えていることを言う権利、自由でいる権利、生きる権利を守るために。それはなにか単純で、たやすく手に入るもののように思えます。でも、実際にわかったのは、誰かがやってきてそれを奪うことがある、ということなんです。

善のために戦ってください。ウクライナとともにいてください。

キーウを逃れて

イリーナ・ペトリチェンコ



皆様こんにちは、イリーナでございます。今回は、日本に避難してからの職探しについてお話しいたします。

じつは、大人として大変恥ずかしいですが、2022 年の春まで「仕事を探す」という経験があまり無かったですし、仕事の探し方も一般論しか分かりませんでした。今までは大学や友人がバイトを紹介したり、日本政府国費留学生として日本留学をしてから在ウクライナ日本国大使館での仕事に就きやすかったり、アカデミックの世界に戻りたいということを仲のいい先生に相談したら母校での仕事を紹介したり、という具合で「仕事を探した」というより仕事が適切なときに「おのずと来る」存在でした。そんな世間知らずの私が3月14日に慣れた世界を離れることを決意し完全に「未知」への旅に出ました。目的地の日本に着いても、臨時滞在先の約束がありましたが、居場所と言えるものは「探さなければ何もない」という人生初の体験でした。

住居探しを前号で紹介してきましたが職探しは、探し方の勉強からスタートし、いざ履歴書を記入しようとしたときに自分の大きな欠点に気がつきました。3月末現在は「住所」や「電話番号」の欄に書くものが無く、メールアドレスのみの人間が日本では信用されないだろうと思い解決策に悩みました。慣れた奨学金等なら申請者の住所や電話番号が未記入でも気づかれないほど重視されないですが、3月後半はウクライナ人の学生を受入れたい日本語学校や大学があっても大人向けは何もありませんでした。仕方なく事務系を中心に探していましたが、3月30日に名古屋大学の留学中お世話になった元教員で東京在住の方から運命の連絡がありました。東京大学の記者会見をテレビでご覧になり「東大　学生・研究者の特別受入れプログラム」の検索を私に勧めました。そのプログラムの詳細を東京大学のホームページで確認しいくつかの部局に問い合わせてみました。東京カレッジというところと話が進み4月15日からの受入が決まりました。非常に嬉しかった反面、自分が受入れ第1号だということを告げられ今度の記者会見出席や学内広報誌へのインタビューなどの予定も分かりました。身に余る光栄を感じてしまいましたが、幸い、心理学の先生の熱心な助言もあり、東大としてはミニミニバージョンで済みました。それでも、何十年ぶりという知り合いからの連絡が相次ぎテレビを見る人の多さに驚きました。

東京大学では、所属の東京カレッジの他に文学部ともご縁ができ、5月や7月にはウクライナ文化の授業でゲスト講師をしたり9月末には熊野研修へ参加したりしました。10月からの秋学期には新科目の「ウクライナ語入門」をある教授とペアで担当しています。以前東京にいたときは日本国外務省で4年近くウクライナ語を教えていましたが、外務省もキーウでの日本語教育も中級以上のレベルでした。外国語をゼロから教えるのは今秋が初めてですが、個性豊かな学生さんや優しい同僚達に恵まれて週1回のそのウクライナ語の授業が毎回楽しみです。

そして、『ポレーシエ』191号でお約束した、住居とセットの多数のサプライズについても今号で詳しくご説明しましょう。自分が住む建物は、もともと震災用の予備住宅に区分されていたので4月～5月中にウクライナ避難者の14世帯計26人がまとめて6階や7階に住まわせてウクライナ村みたいなものができました。そのコンパクトさに法務省も目を付け、6月上旬に出入国在留管理庁の職員が調査で回ったり、6月末に避難者や受入熱心な三鷹市の生の声を聴きに法務副大臣もいらした（三鷹市側には彼の存在が法務副大臣というより地元ブランドの「太宰治」の孫として映りこれも大歓迎されました）。一方、東京都も日本語のできるウクライナ避難者に対してウクライナの行政サービスのデジタル化についてのヒアリング（謝礼付き）を実施したり、ウクライナからの来賓が都知事と面会する時に避難者代表をお願いしたり、「ウクライナ避難民ワンストップ相談窓口」でのウクライナ語職員募集をメールで特別案内してくれたり。そのおかげで、私は7月1日からワンストップ相談窓口でも働くことになりました（研究等の妨げとならないように週1日勤務を希望しました）。

ウクライナ避難民ワンストップ相談窓口とは、数年前にできた「外国人相談ナビ」（東京都つながり創生財団）が母体で、多言語で外国人に対して都や国のサービスを案内したり、市区町村の窓口が外国人対応で困ったときの電話通訳をしたりするところで、ウクライナ避難者の都営住宅受付もします。私と同じ曜日に勤務する多言語相談員は、英語やスペイン語、やさしい日本語、タガログ語、韓国語、ネパール語を担当し、それ以外の言語は通訳会社を入れての3者通話で対応します。私はまだ半人前なので、ウクライナ人対応の通訳やチラシ等の翻訳、相談員としての勉強をしています。これも非常に面白い仕事で、自分が他人の役に立っていることを肌で感じられます。そして、難しいケースなら相談員のみんなが一丸となって知恵を絞り成功に導こうとする光景も楽しみです。

（次号へ続く）

連載 143

着実に増加している「永続地帯」

―――再生可能エネルギーと食料自給―――

読者の皆さんは「永続地帯」という言葉をご存じだろうか。著者も最近まで知らなかった。千葉大学の倉坂研究室とＮＰＯ法人環境エネルギー政策研究所が 2007 年以降、日本国内の再生可能エネルギー自給率と食料自給率について調査分析し、双方の自給率が 100%を超える自治体を「永続地帯」と名付けて毎年報告書を出している。政府やマスコミは地球温暖化対策やウクライナ・ロシア戦争によるエネルギー危機を煽り、老朽原発再稼働や小型原発開発などの必要性を主張するが、大都市を除く地方自治体では地道な取り組みによる「永続地帯」が着実に増加している。因みに千葉大学自体も全消費エネルギーの 100%を自給している。

「永続地帯」の定義

千葉大学坂倉研究室による「永続地帯 2021 年度版報告書」によれば、各自治体による再生可能エネルギーによる電力と熱エネルギーを合わせた 100%以上を自給している「エネルギー永続地帯」と地域の食料自給率 100%以上の「食料永続地帯」を合わせたものを「永続地帯」と呼ぶ。それによれば、2011 年のエネルギー永続地帯は 50 自治体に過ぎなかったが、2020 年には 174 に増加し全国自治体の 10%になった。電力自給率だけをとれば 272 自治体（15.6%）が再生可能エネルギーで電力を自給している。エネルギー永続地帯の数で抜きんでているのは秋田県（51.3%）と大分県（50.0%）で、約半数の自治体が再生可能エネルギーで自給している。全国の 90 自治体では食料自給率も 100%を超える「永続地帯」となった。

エネルギー永続地帯の手段

電力と熱エネルギーの自給の手段は地域によって様々である。太陽光や風力、地熱、小水力、バイオマス等によって電力や熱エネルギーを作っている。エネルギー自給率のランキングを挙げると、No.1 は大分県珠洲郡九重町（1186%）、No.2 は長野県下伊那郡平谷村（1026%）である。電力自給率だけを取れば No.1 はやはり大分県珠洲郡九重町（2516%）、No.2 は熊本県球磨郡五木村（2225%）である。何れも大分県や長野県の自治体が上位を占めている。21 年度版報告書では、永続地帯の世界的動向も調べている。電力と熱エネルギーを合わせた「エネルギー永続地帯」の世界 No.1 はスウェーデン（60.1%）、No.2 はフィンランド（43.8%）である。

食料永続地帯

日本全体の食料自給率は現在 28%で厳しい状況が続いている。円安やロシア・ウクライナ戦争で状況は更に悪化しつつある。しかし、全国の自治体別にみると状況は異なる。永続地帯報告書によれば、都道府県別のランキングは No.1 が北海道（206.8%）、No.2 が秋田県（195.1%）である。自給率 100%以上は北海道、秋田、山形、青森、岩手で、最下位は当然の事だが東京都（0.61%）である。東北地方は高齢化による人口減少なども影響している。それでも地方自治体数でみると 90 の自治体が食料自給率もエネルギー自給率も 100%を超えている。

危機に煽られずに着実な前進を

政府やマスコミはエネルギー危機や食糧危機を煽り、チェルノブイリやフクシマの教訓を忘れたかのように原発推進政策を進めている。食料自給率低下の原因は、自動車などの輸出産業を優先し、食料を米国に頼るこれまでの政策の結果である。今こそエネルギーと食料の自給を求めて地道な政策に転換すべきである。

（2022 年 11 月 5 日　河田）

今、ウクライナ・ジトーミル州では…　『開かれた心で』

「チェルノブイリの人質」基金　イェウヘーニヤ・ドンチェヴァ

〈2022 年 11 月 5 日〉

今日、私は戦争開始後 254 日目のジトーミルの生活についてお話ししたいと思います。

この困難な時期、私たちに気力と自信を与えてくれる、前向きなニュースから始めたいと思います。まず、9 月 1 日から学校で授業が始まりました。かつての平和な生活のささやかな一部分です。絶えることのないミサイル攻撃の脅威にもかかわらず、小学校 1 年生のために行われた「最初のベル」[訳注：新入生の学びの始まりを、手持ちの鐘を鳴らして象徴的に告げる式典]のお祝いがとりわけ私たちを喜ばせてくれました。中学校と高校は、オンライン授業に移行しました。小中学校の保護者を対象にアンケートが行われ、40％が対面授業を、残りは自宅での学習を希望しました。そのため、オンライン授業に伴ういろいろな問題が生じます。教師たちの持っているノートパソコンは、機能が不充分だったり老朽化していたりで、その結果子供たちの授業用の最新のヴィデオ・プログラムを用いることができません。また、どの学校でも、オフィス機器、特に多機能プリンター(スキャンとコピーの機能がついているもの)が足りないと訴えています。生徒たちが副読本を使えない中、教師たちが授業を準備し実施する手助けになるものです。そして現時点での主要な問題は、インターネットに関してです。

というのは、ミサイルやドローンによって変電所や発電所が攻撃され、市全体が停電・断水し、集中暖房が止まることがあるからです。そのような生活が、ここ数週間続いています。そのため今日、エネルギー関連のインフラ施設の防衛が重要なのです。数日前、ジトーミル州で 2 基のミサイルが撃墜されました。それらはジトーミル市に向けて発射されたものでした。つまり、再度エネルギー関連のインフラが攻撃を受ける可能性があるということです。

南相馬市青葉幼稚園からのメッセージを受け取る25 番学校の子ども達

支援物資を運ぶドンチェヴァさん

ジトーミル市議会は、このような状況が生じた場合の主な対策を作成しました。まず第一に、電力を大幅に節約すること(一戸建て住宅や集合住宅では、特に電化製品が集中して使われる夕刻)、そして上水の節約です。これは 2 つの段階に分かれています。第 1 段階では、夜間に浄水を行い、市の需要をまかなう貯水槽をいっぱいにします。第 2 段階として、10 時から 16 時の間に上水道の水圧を下げます。市民にとっては不都合なことですが、私たちは理解しています――戦時なのだと。

国内難民と呼ばれる人たちについてはすでに書きました。戦争が始まって以来、ジトーミル市には 1 日あたり 200～250 人の人たちがやって来ました。夏には人数が減り、30～40 人、20 人という時もありました。今は平均して 45～50 人です。激しい戦闘が行われている地域から逃れることのできた人たちだけではなく、解放されたもののインフラが破壊されてしまった地域で、残念ながら冬季を過ごすことのできない人たちも含まれます。ジトーミルにやって来る人たちの大部分は、友人知人や親戚の家に身を寄せます。多くの人たちは、ここが彼らの小さな祖国だと言います。つまり、彼らはもう何年も前、学業のためにジトーミルを離れてそのまま戻らなかったのに、戦争が彼らを送り返したのです。中継地点としてジトーミルに留まる人もいます。数日を過ごし、さらにウクライナの西部、あるいは外国に向かうのです。仮の住まい、教育施設の寮に入る人もいます。生活はできますが、どの寮でも洗濯機や炊事用のレンジ、乾燥機、シーツ、食器が不足しています。

戦時下の一日一日が、ウクライナ人たちの記憶に残っていきます。私たちは別の人間になりましたが、重要なのは、以前よりも強くなり、連帯を強めたことです。でも本当に、平和が、そしてかつての平和な生活が、戻ってきてほしいのです……。

南相馬「種まき会」　報告

9 月 24 日、南相馬で実行委員会主催の「種まき会」イベントが行われました。

予定では午前 10 時から陣ヶ崎の圃場で種まき会を行う予定でしたが、連日の雨で圃場がぬかるみ種まきが出来ないことが判明、急遽、高（たか）構造改善センターに会場を移しイベントのみ行いました。

会場には主に南相馬で菜種栽培をしている農家の方々とその家族が参加しました。栃木県上三川の震災関係NPO「てるてる坊主の会」の方々が数名参加され、屋外に天幕を張り絞りたての油を使った湯麺や揚げ餃子の提供がありました。また「揚げまんじゅう」や「ポテトチップ」などもテーブルに並びました。会場では久しぶりに友人に出会い旧交を温めることが出来ました。

また新潟県出身の武蔵野音大 3 年生の全盲のプロ歌手「佐藤ひらり」さんのライブもありました。歌った曲は、川の流れのように、褒められ行進曲、アメージインググレースなどでした。お土産は今年産のナタネから搾った「油」小瓶、と宇宙に行ってきた菜種でした。

会場では陣ヶ崎、萱浜・雫、大甕・高、中太田、矢川原、大富、等の生産者・農家の発言もあり、今年から栽培を始めた方もありました。こんなに大勢の生産者がいたことを初めて知り驚きました。食事がおいしかったこともあり、和やかに種まき会イベントは終了しました。

10 年を経てこれが新しい南相馬の菜種栽培のスタートの一つなのだと感じました。　全体で 40 名ほどの参加者でした。（原）

南相馬のひとり親家庭の支援のこれから

南相馬市社会福祉協議会を通して、ひとり親家庭や障がい者のご家庭、ひとり暮らしの高齢者に、「油菜ちゃん」を贈り届ける支援が昨年スタートしました。地元で生産している菜種油を知っていただくよい機会にもなりました。しかし今年の3月以降、油菜ちゃんの生産は停止。南相馬農地再生協議会の信田沢搾油所が市との賃貸契約期限を迎え閉鎖をしたためです。今年度、初めて正式にこの事業を予算化し、本腰を入れて支援を行うことを決めた矢先のことでした。

その後、『油菜ちゃんに代わる』支援をどのようにしていくか協議し、率直に社協の方にご相談したところ、「公的な財政支援のない『子ども食堂』の次年度の予算は白紙という状況だけれども、お弁当だけでなく、お米、野菜、果物、お菓子などを提供し、もう一歩気持ちが豊かになる支援をしていきたい」という意気込みをお聞きしました。

一年前に比べ、ひとり親家庭の方々の暮らしはより厳しくなっているのに、資金面は乏しいという実情を知りました。それならば、今は社協の活動を支えるためには寄付金が一番よい、という結論になりました。今年度のお弁当の配布の回数を 4 回予定しているけれども、チェル救の支援金により増やすことが可能になるとのことです。

南相馬が被災地となってから 11 年、円安による不景気、物価・光熱費の高騰、ロシアのウクライナ侵攻…と、暮らしを脅かす魔物たちは被災地に容赦なく襲ってきます。このような状況から「福島支援」の形も、柔軟な対応が求められます。皆さまの心温まるご理解をいただけるものと信じています。（市原）

2022年度上半期　活動計算書

特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部　（単位：円）
（特定非営利活動に係る事業会計）　自 2022年 4月 1日　至 2022年 9月30日

科目			金額	
【経常収益】				
１．受取会費	正会員受取会費	93,000		
	賛助会員受取会費	176,000	269,000	
２．受取寄付金	粉ミルク支援	138,000		
	ﾁｪﾙﾉﾌﾞｲﾘ支援(被災者団体)	317,400		
	福島原発被災支援	50,900		
	ウクライナ救援基金	13,108,971		
	一般寄付	2,288,342	15,903,613	
３．事業収益	福島支援事業	95,611		
	イベント関連事業	0	95,611	
４．その他の収益	受取利息	57		
	雑収入	35,000	35,057	
経常収益　計				16,303,281
【経常費用】				
１．事業費				
（１）人件費	給料手当・日当	0		
	人件費計	0		
（２）その他経費	業務委託費	482,642		
	支援金	7,568,658		
	印刷製本費	153,900		
	諸謝金	22,274		
	旅費交通費	44,105		
	通信費	79,022		
	荷造運搬	131,214		
	消耗品費	2,153		
	賃借料	8,000		
	仕入	18,330		
	諸会費	0		
	支払手数料	114,705		
	その他経費計	8,625,003		
事業費　計			8,625,003	
２．管理費				
（１）人件費	給料手当	991,400		
	法定福利費	5,605		
	人件費計	997,005		
（２）その他経費	通信費	85,673		
	水道光熱費	59,404		
	会議費	0		
	消耗品費	83,970		
	印刷製本費	46,838		
	荷造運賃	770		
	地代家賃	396,000		
	保険料	7,730		
	租税公課	1,200		
	支払手数料	55,126		
	その他経費計	736,711		
管理費　計			1,733,716	
経常費用　計				10,358,719
当期正味財産増減額				5,944,562
前期繰越正味財産額				11,819,559
次期繰越正味財産額				17,764,121

※定款（事業）第5条に基づく「その他の事業」は実施していません。

2022年度　財務諸表の注記

１．重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO法人会計基準(2010年7月20日　2017年12月12日最終改正　NPO法人会計基準協議会)による。

（１）　棚卸資産の評価基準及び評価方法

棚卸資産の評価基準は原価基準、評価方法は最終仕入原価法による。

（２）　固定資産の減価償却の方法

有形固定資産は、法人税法の規定に基づいて定率法で償却をする。

（３）　消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税込経理方式による。

２．事業別損益の状況

事業別損益の状況は以下の通りです。

（単位：円）

科目	医療機関支援事業	被災者団体支援事業	粉ミルク支援事業	クリスマスカード事業	業務委託事業	通信誌発行事業	イベント関連事業	ウクライナ救援事業	福島原発被災支援事業	事業部門計（A）	管理部門（B）	合計（A＋B）
【経常収益】												
受取会費											269,000	269,000
受取寄付金（指定寄付）	158,700	158,700	138,000					13,108,971	50,900	13,615,271		13,615,271
受取寄付金（指定なし按分）	146,454	146,454		22,884	109,841	123,570	61,785		665,907	1,276,895	1,011,447	2,288,342
事業収益									95,611	95,611		95,611
その他の収益								31		31	35,026	35,057
経常収益　計	305,154	305,154	138,000	22,884	109,841	123,570	61,785	13,109,002	812,418	14,987,808	1,315,473	16,303,281
【経常費用】												
（１）人件費												
給料手当・日当											991,400	991,400
法定福利費											5,605	5,605
人件費計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	997,005	997,005
（２）その他経費												
業務委託費					482,642					482,642		482,642
支援金								7,568,658		7,568,658		7,568,658
諸謝金								22,274		22,274		22,274
印刷製本費						89,370		64,530		153,900	46,838	200,738
会議費										0		0
旅費交通費									44,105	44,105		44,105
通信費				6,668		43,729		1,070	27,555	79,022	85,673	164,695
荷造運搬費						119,344		990	10,880	131,214	770	131,984
消耗品費						745	1,408			2,153	83,970	86,123
地代家賃										0	396,000	396,000
水道光熱費										0	59,404	59,404
貸借料							8,000			8,000		8,000
仕入									18,330	18,330		18,330
保険料										0	7,730	7,730
租税公課										0	1,200	1,200
諸会費										0		0
支払手数料	2,349	2,353	1,777		28,500		110	78,502	1,114	114,705	55,126	169,831
その他経費計	2,349	2,353	1,777	6,668	511,142	253,188	9,518	7,736,024	101,984	8,625,003	736,711	9,361,714
経常費用計	2,349	2,353	1,777	6,668	511,142	253,188	9,518	7,736,024	101,984	8,625,003	1,733,716	10,358,719
当期経常収支差額	302,805	302,801	136,223	16,216	△ 401,301	△ 129,618	52,267	5,372,978	710,434	6,362,805	△ 418,243	5,944,562

2022年度上半期（2022年4月1日～2022年9月30日）の会計報告を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

2022年　12月　1日　　監査人　大谷早苗

【寄付・会員状況のお知らせ】

◆9 月　寄付／会費　　142,000 円
◆10 月　寄付／会費　　594,000 円
◆2022 年度累計（ウクライナ救援基金を除く）
3,361,642 円（10 月末）

◆ウクライナ救援基金　19,333,460 円
（2022/3/7～10/31）

◆会員数　179 名（正会員　47 名・賛助会員　132 名）
◆ポレーシェ読者数　642 名

～心温まるご支援をありがとうございました～

【寄付のお願い】

◆一般寄付
三菱UFJ 銀行　高畑支店　普通　1682863
◆ウクライナ救援基金
三菱UFJ 銀行　名古屋営業部　普通 6949211
◆郵便振替　00880-7-108610
〈口座名義〉
特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部

＊クレジットカードでも受け付けております
（ページ下の QR コードから寄付ページへアクセス！）

※領収書が必要な方はご連絡ください

事務局だより

2022 年 2 月 24 日ロシアのウクライナ侵攻以来、多くの方々からウクライナ緊急支援のご寄附を頂き、戦火に見舞われているウクライナの人々に届けました。以下、今までに執行した支援明細表です。尚、頂いたご寄附により、今後は厳冬のウクライナ支援を実施いたします。

ウクライナ支援明細表（2022 年 11 月現在））

送金日	金額	支援先	品目	備考
3/14	5,000,000 円	ナロジチ地区中央病院、プリピャチ・センター、事故処理作業者	医薬品（144 品目）医療機器（6 品目）粉ミルク	ドイツ経由　＊宗教法人真如苑のご寄付
4/25	3,000,000 円	ジトーミル第一市民病院、市立小児病院、非常事態省医療センター	ピリルビンメーター、光源ランプ、蒸留水製造装置など	ウクライナ直接送金
5/16	2,742,645 円	ジトーミル第一市民病院、州立産期センター、ナロジチ地区中央病院、オブルチ病院産科、非常事態省医療センター、事故処理作業者基金、消防士	パルスオキシメーター、滅菌装置、手術着など、医療機器（26 品目）、医薬品（206 品目）	ドイツ経由
6/22	608,070 円	ジトーミル州消防局	赤外線カメラ	ドイツ経由
6/27	465,142 円	ナロジチ地区中央病院	内視鏡光源装置	ウクライナ直接送金
7/22	68,400 グリブナ	ジトーミル州消防局	耐衝撃性タブレット（6 台）	過去の送金残高より
8/5	275,200 円	オブルチ消防署、オブルチ病院	消防士用防火靴、ライト等、病院用滅菌白衣、使い捨て手袋、注射器、縫合用品、医薬品	ドイツ経由（広島文化学園大学とコラボ）
8/10	447,581 円	ジトーミル州立医療コンサルテーション・診療センター	酸素濃縮器、気道陽圧ユニット、液体自動ディスペンサー、外科手術用器具等	ウクライナ直接送金 ＊（特活）アーユス仏教国際協力ネットワークのご寄附
10/12	665,730 円	ホステージ基金	車購入支援	ウクライナ直接送金
総額	13,204,388 円　（うち、ウクライナ救援基金より 8,204,388 円を送金） 68,400 グリブナ（過去送金残高を使用し 7 月に購入）			

＊上記の他、一般会計から支出

8/10	219,362 円	ホステージ基金	事務所改修費・業務委託費	ウクライナ直接送金

発行　特定非営利活動法人　チェルノブイリ救援・中部
〒460-0012　名古屋市中区千代田 5 丁目 11-33 ST PLAZA TSURUMAI 本館 5B
TEL＆FAX　052－228-6813（月･水･金　10:00 ～ 17:00）
E-mail　chqchubu@muc.biglobe.ne.jp　URL　http://www.chernobyl-chubu-jp.org
印刷　エープリント